務台理作の信濃教育会における役割の検討

―信濃哲学会を中心とした京都学派との関係に着目して―

金　井　　徹

本稿は，戦前戦中を通して信濃教育会や長野県内の各教育会において務台理作の果たした役割について，務台の信濃哲学会における活動を中心に検討したものである。

信濃教育会と務台理作との直接的な関係は，長野師範学校訓導として赴任して以降の1914（大正3）年に始まったが，それ以前から長野師範学校卒業者との人脈が形成されていた。翌年に京都帝国大学に進学した務台は，1915（大正4）年から1945（昭和20）年にかけて西田幾多郎門下として，信濃哲学会の創立と活動に関わり，信濃教育会や長野県内の各教育会と京都学派とを結びつける役割を果たした。こうした信濃哲学会を中心とした務台の活動は，戦前・戦中から戦後にかけての信濃教育会の「伝統」と「世論」の形成にとって大きな影響を与えたものであったと考えられる。

キーワード：務台理作，信濃教育会，信濃哲学会，長野師範学校，京都学派

はじめに

本研究は，戦前戦中を通して信濃教育会や長野県内の各教育会において務台理作の果たした役割を検討しようとするものである。

まず，務台理作の履歴（本稿末尾の表1参照）を略述すると，1906（明治39）年に高等小学校卒業後，松本市の私立郁文学校[1]中学部に入り，代用教員を経て，1910（明治43）年に東京高等師範学校に入学している。そして，東京高等師範学校卒業後の1914（大正3）年に長野師範学校に教諭兼訓導として赴任した後，翌1915（大正4）年その職を辞して京都帝国大学文学部哲学科に入学し，西田幾多郎に師事し大学院まで進んでいる。大学教員としての務台は，京都帝国大学文学部副手を経て，1923（大正12）年に大谷大学学部哲学科西洋哲学史教授となった。さらに，1926（大正15）年に台湾総監督府高等学校教授となってドイツ，フランス等における2年間の在外研究を経た後，1928（昭和3）年に台北帝国大学文政学部教授，1935（昭和10）年に東京文理科大学教授，1945（昭和20）年に同大学長，1951（昭和26）年に東京文理科大学を退職し慶應義塾大学文学部教授に転じている。

教育会についての研究に関して梶山雅史（2010）は，「序章 教育史研究の進捗を願って」において，「官立，府県立師範学校スタッフが，各大学区教育会議や府県教育会議においていかなる活動・機能・

教育学研究科　博士課程後期／修紅短期大学幼児教育学科　専任講師

役割をはたしたか」という研究視点が要請されるとし，「東京師範学校等の官立師範学校，地方各地に設立された師範学校，それらの機関において養成された卒業生の時代的・歴史的メンタリティの特性が，『学事諮問会』，『教育会』の有りよう，その特質形成に大きく作用していたことを押さえておきたい」[2]と指摘している。前述のように務台理作は，まさに東京師範学校卒業者であり，県立師範学校スタッフであったのであり，信濃教育会において務台理作の果たした役割を検討することは，師範学校卒業者の時代的・歴史的メンタリティの特性の一端を明らかにすることにもつながるものであると考えられる。もっとも務台は，純粋な師範学校卒業者ではなく，高等師範学校－京都帝国大学という進学ルートを辿り，京都帝国大学卒業者でもあるという特殊な要素が加えられる。

務台理作と信濃教育会との直接的な関わりについては，まず務台が，1914年に長野師範学校に赴任して以降の，信濃教育会の発行する雑誌『信濃教育』[3]における著作活動を挙げることができる。務台の『信濃教育』における著作活動は，師範学校を辞して京都帝国大学に進学した後も続き，その晩年に至るまで断続的に継続している。さらに，この雑誌『信濃教育』における著作活動とも関連するが，1920（大正9）年1月に創立された信濃哲学会との関わりを挙げることができる。信濃哲学会は，京都帝国大学在学時の務台理作が，その師である西田幾多郎と信濃教育会との間を取り持つことによって実現した[4]とされるものである。この信濃哲学会自体は，昭和20年の西田幾多郎の死とともに解散したが，信濃哲学会創立以降，長野県内各地に哲学会が発足していった。そして，長野県内各地の哲学会に務台をはじめとして西田門下生たちが講師として招かれ，継続的に哲学の研究を行っていた。

このように，晩年まで継続した務台の『信濃教育』における著作活動や，信濃哲学会を通した信濃教育会との深い関わりは，務台が形成していった教育会人脈，なかでも長野師範学校関係者との人脈が大きな要因となっていると考えられる。そうした観点から，務台の履歴（本稿末尾の表1参照）を再度見直した場合，重要な時期がいくつかある。まず，高等小学校時代に松岡弘（長野師範学校卒業，長野師範学校校長星菊太排斥事件で休職，終戦後の信濃教育会会長）及び金井虎雄（長野師範学校卒業，後に南安曇教育会長）と同級となり，代用教員時代の勤務校校長が岡村千馬太（長野師範学校卒業，人格主義教育を掲げる東西南北会を主導）であり，東京高等師範学校時代に同宿となったのが長坂利郎（長野師範学校卒業，長野師範学校校長星菊太排斥事件で休職，後に信濃哲学会創設に尽力，『信濃教育』編集委員）であり，長野師範学校訓導時代に松本弘を通して菅沼知至（長野師範学校卒業，信濃哲学会を主導）を知るというように，信濃教育会の主要な会員や，後に主要な役割を担う会員との人脈を形成していった。

また一方で務台は，こうした信濃教育会に関わる人脈を保持したまま，1915（大正4）年以降の京都帝国大学時代に西田幾多郎及びその関係者（安倍能成など）や，所謂京都学派とされる門下生（高坂正顕，下村寅太郎など）等と親交を結んでいくこととなった。

本稿は，以上のような務台理作の長野師範学校関係者と京都学派関係者を中心とした人脈形成に着目し，務台が信濃教育会において果たした役割の特質と，そのことの有する意味とを検討しようとするものである。検討する主な資料は，長野県内の各教育会史に散見される信濃哲学会に関する記述，

教育会史の中でもとりわけ務台に焦点を当てている『南安曇教育会百年誌』の記述，またその南安曇教育会会員が中心となって編集されたとされる『務台理作と信州』における務台理作の著作及び書簡類[5]である。

1　東西南北会の活動　ー長野師範学校卒業者のメンタリティと信濃哲学会創設前史ー

ここでは，信濃哲学会創設の前史として東西南北会について検討を行う。なぜなら，この東西南北会の主導者の一人が先述の岡村千馬太であり，また，東西南北会の名を一躍有名にしたとされる星菊太長野県師範学校長排斥事件（1915（大正4）年2月20日）の関係者として，後に信濃哲学会の主要メンバーとなった先述の長坂利郎，松岡弘等が関わっているからである。そしてまた，岡村，長坂，松岡等は長野師範学校卒業者であり，こうした検討は，1915年前後の長野師範学校卒業者の時代的メンタリティの特性を明らかにしようとするものでもある。

まず，東西南北会の主導者の一人である岡村千馬太の履歴を『南安曇教育会百年誌』に依って略述すると，1875（明治8）年2月，南安曇郡明盛村中萱（現安曇市）に生まれ，1890（明治23）年に南安曇高等小学校を卒業後，小学校に授業生として勤務し，1893（明治26）年には長野尋常師範学校に入学した。師範学校卒業後，高等小学校訓導に任命され，1901（明治34）年に小学校長となったのち数校の校長を歴任（この間の東筑摩郡和田小学校長時代に務台が代用教員として赴任している）し，1911（明治44）年に山形小学校長（現長野県東筑摩郡山形村）となった[6]。この山形小学校長時代に東西南北会の創立を主導したとされている。さらに，1914（大正3）年に諏訪郡視学，さらに小県郡視学を経て1920（大正9）年長野県視学に任命されている。信濃教育会において岡村は，1912（大正元）年から1916（大正5）年まで，東筑摩部会や諏訪部会の選出議員となっており，1920（大正9）年から1928（昭和3）年にかけて，評議員や幹事を務めている[7]。

岡村が山形小学校長となった1911（明治44）年頃に創立されたとされる東西南北会は，長野県師範卒業の青年教師が中心となって，人格主義教育を標ぼうする教師集団であった[8]という。東西南北会という名称は，三宅雪嶺らの雑誌『日本及び日本人』の「東西南北」欄にちなんだものとされ，「天下第一の人格者を招いて，その人と語ることによってお互いの人格の向上をはかる」という趣旨であったとされる[9]。当初は，教員にとどまらず，老若職業を問わず，教師・商人・農民・経済人だれでもよい，来るものは拒まず，去るものは追わずというきわめて自由なあつまりであったとされ，1912（大正元）年以降，三宅雪嶺や杉浦重剛，犬養木堂等を招いて講演会を行ったとの記録がある[10]。

こうした東西南北会の動きが，大きく県民に報じられたのは，星菊太長野師範学校長排斥事件であった。事件の顛末について，1915（大正4）年2月22日の『長野新聞』において次のように記されていた。

少壮教育家憤起して大に星師範校長の反省を促す

本県師範学校卒業生中の少壮教育家より成る南北会は廿日夜長野市善光寺裏燕の湯に於て会合を催し出席者は諏訪，東筑，松本，南安，北安，北佐久，小県，埴科，上水及び市在住社等五十余名にして専ら師範学校の近状に就て研究する処あり星校長の教育方針は全然長野県に適応せざる者

なるを以て同氏を本県師範学校長として置くは勢い長野県の教育を蠹毒する者なりと同氏の反省を促す可く委員十二名を挙げて散会し同委員は昨日午前九時師範学校に星校長と会見し所信を披歴して星校長の反省を促し寧ろ此場合長野県を去る事の両者の為利益なる事を列挙したるに星校長もまた其来意を諒としたるが尚南北会員は同日師範学校内に開会せる学友会に出席して専ら生徒の自奮を促し大に長野県教育の声価を発揚せん事を力説したり　尚同会員諸氏は暫く星校長の態度を観望し同氏にして反省せざるに於いては更に何等かの方法を取る筈なりと云う[11]（下線は筆者）

星校長に反省を促す委員十二名の一人であった長坂利郎は，1915（大正4）年1月1日から『長野新聞』に「委靡振るわざる師範教育，敢て校長星菊太氏の猛省を促す」として，星菊太長野師範学校長を論評する記事を発表している。その中の一節では，次のように述べられていた。

長野県教育の源泉地と称せらるる我長野師範教育の如何は，是県下教育界に心を寄るものの，一刻も忘るべからざる事なるにも拘はらず，最近更に是に論評を試み警告を与ふるものなく，杳として我教育社会より等閑視されんとす，こは，我教育界のためにも，また師範学校のためにも，喜ばしからざる事にして，同じく斯道を志すものは，宜しく，その源に遡りて，学校教育の如何を探索し大に論議して，以て意のあるところを公表し，共に我教育界の改善を促し，その向上発展を計るべきなり。（中略）我母校の長たる，星菊太氏の後進にのぞむ教育方針は如何，一言にして之をつくせば，余輩は之に賛成する能はざるなり。無論其の全般を否定するにあらざるも，大体に於て氏の方針は頗る消極的にして去勢教育に非ずやと疑はるる点多々あり。云うまでもなく，余は二三の事柄によりて，その方針を忖度するに過ぎざれど，併も其の多くは誤らざるを信ずるが故に爾く此所に断言せんとするなり。聞くならく，氏は生徒に向て，哲学文芸を厳禁しベルグソンやトルストイを読むのは，蛇蝎視して，遂には，学校より放逐せんと迄，威嚇せる事ありと云えり，斯くの如きは余りにも狭量の遣り方にあらずや，聡明なる氏は青年の心理を理解し居る可し，すでに，成年期に達したる青年の自然の状態として，心はいつか人間宇宙に関する疑義に向ひ，朧気ながらも何物かその解釈を求めて，やまざらんとするの傾きあり。殊に，我信州の青年は，先天的に思想方面に発達し易き性を有し，少しく何物かの暗示を得れば，忽ち精神の高潮を喚起して，以て，器械的なる現実的なる事相に反し，空想に近きまでに理想に憧憬し去るの気風あり。されば，彼等生徒は，漸次精神の動揺を惹起するに随ひ，悶々遣る方なく，遂には之が解決と縁遠き教科を捨てて，自ら他に何者かの共鳴を求めんとし，或は哲学に走り，或は文芸に向ふ，宜なり。（中略）然るを，一に学生に必要なる一面のみを強求し，その精神の奥底に醗酵し来れる強き欲望を抑圧し，無理やりに一種の消極的なる学生のタイプに強ひつけんとす　これ青年自然の心理に背くものにして，決して完全なる教育方法と云う可らざるなり，余は，其慾求を善導せんがために，校長その人が，思想界の先導者となりて，彼等を教ゆる可く翹望せずんばあらず。[12]（下線は筆者）

以上のように長坂は，星校長が長野師範学校から哲学文芸を放逐せんとすることを批判し，その

ことは，青年の自然の状態，さらには先天的に思想方面に発達し易き性質を有する信州の青年の心理に背くものであるというのだった。

この星校長排斥事件において，前述の長坂利郎や松岡弘をはじめとした代表委員十二名[13]が，1915（大正4）年3月8日付をもって一年間の休職処分[14]（10月13日に解除され実質七ヵ月の休職）となり，星菊太校長も1915（大正4）年9月に静岡県師範学校長に転じた[15]。『長野市教育会史』に依れば，「星校長の排斥は，事実上は成功した」とされ，その後，東西南北会は信濃教育会や信州教育界において強い発言権をもつようになり，同時にそれらを支え，この影響で中央の名士が県教育界へ招かれるようになった[16]という。また，『長野県教育史』において東西南北会は，「大正初期の人格主義的な教育思潮をふまえ，大正前期に県教育界の主流を構成した教員集団であった。（中略）白樺派教員とは明らかに異なり，むしろ信濃教育会や佐藤学務課長らを支え推進した教員たちで，『最も鮮明濃厚であった信州の地方色』を形成した人々であった」[17]と称されている。

1914（大正3）年4月から長野師範学校訓導となっていた務台と東西南北会の活動との直接的関係は明らかでないが，まさにその星校長排斥事件によって長坂利郎，松岡弘等が処分された後の1915（大正4）年7月に，師道，学風のすたれていることを嘆き[18]，長野師範学校を退職し，西田幾多郎に師事するため京都帝国大学文学部哲学科に入学したのだった。務台は，自身の長野師範学校訓導時代について，「学究生活の思い出」において次のように回顧している。

> 私の精神状況の中にはローマン主義，自然主義，ヒューマニズム，自由主義と，いろいろなものが渦巻き，どれも私を決定的なものにしなかった。ニーチェとベルグソンとが同居していた。（中略）この間に西田幾多郎の『善の研究』を読んだ。この書物をはじめに私にすすめたのは高師の寄宿舎で同室にいた土田杏村であった。長野師範の教師をしている間に信州の小学校の教師菅沼知至（その頃は柳本といっていた）と知り合いになったが，彼は熱烈なその愛読者であった。菅沼は信州の小学校長をしたり県視学をしたりして今は伊那の郷里にひきこんでいるが，どうして西田幾多郎に傾倒したかはよくわからない。とにかく彼は信仰に近い熱情をもって西田のものを愛読した。西田の京大の『芸文』に連載した（後に『哲学研究』に連載）「自覚に於ける直観と反省」をガリ版印刷にして教師仲間に分けたりしていた[19]（下線は筆者）

こうして，星校長排斥事件の後に京都帝国大学の学生となった務台理作を媒介として，東西南北会の主要メンバーであった岡村千馬太をはじめ，長坂利郎や菅沼知至等，信濃教育会の長野師範学校卒業者達は，長坂の言を借用すると，「自ら他に何者かの共鳴を求めん」として，西田「哲学に走」ったのであった。星校長への論評において，長坂利郎の述べた「我信州の青年は，先天的に思想方面に発達し易き性を有し，少しく何物かの暗示を得れば，忽ち精神の高潮を喚起して，以て，器械的なる現実的なる事相に反し，空想に近きまでに理想に憧憬し去るの気風」とは，務台の回顧から言っても，信州の青年というよりは，長野師範学校の卒業生のメンタリティにより近いものであったと言えよう。

2　信濃哲学会と務台理作

2－1　信濃哲学会の創立と活動

1920（大正9）年1月に創立された信濃哲学会と務台理作との関係については『南安曇教育会百年誌』が詳しい。ここでは，その内容を踏まえて，信濃教育会における信濃哲学会の創設とその活動について，務台の果たした役割に着目して検討を行う。

『長野市教育会史』に依ると，信濃哲学会の創立より前に，西田幾多郎と長野県教育界とを結びつけたのは，岩波茂雄，務台理作，金井正[20]らであった。1916（大正5）年の夏，岩波から諏訪教育会での講演を依頼された西田に，京都大学の学生であった務台が，長野へも回ってくれるように依頼した。務台の『思索と観察』によると，「信州長野の哲学研究会で先生を招きたいということを，その世話をしていた長野市後野小学校長の守屋喜七[21]さんから依頼された」とある[22]。

菅沼知至は，西田幾多郎と長野県教育界とが，それまで以上に強く結びつくこととなった経緯について，「信濃哲学会と私」（『信濃教育』70周年記念号）の中で次のように述べている。

> 務台君は大正四年長野師範を退いて，その年の九月，京大哲学科に入学し，西田先生について研究することになった。これが西田先生と信州とを結びつけてくれる大事な機縁となり，ひいては信濃哲学会が生まれ，そして成長していくうえの，いちばん大事な根本の力となったのである。大正五年八月二日・三日・四日の三日間，西田先生をお招きして，諏訪・上田・長野の三か所で講演をしていただくことができたのも，まったく務台君の御尽力とごあっせんのたまものであった。[23]
> （下線は筆者）

この講演の経緯について，『南安曇教育会百年誌』に依ると，1916（大正5）年8月2日の諏訪での講演では務台理作は上諏訪の岡村千馬太（当時諏訪郡視学）宅にきていて，上諏訪駅で西田幾多郎を迎えたという。西田は，同年8月3日に上田中学校講堂において小県部会主催で「現代哲学における科学的眞理の概念」を，同年8月4日に長野市部会主催の夏季臨時講習会という名目で「現今の唯心論」を講演したとされる[24]。そして，この講演の要旨が雑誌『信濃教育』（359号，大正5年9月）に掲載された。

このように，務台理作を媒介として西田との関係を深めた長野師範学校卒業者を中心とする信濃教育会の会員は，西田哲学への関心を強めて行った。『長野市教育会史』に依ると，西田哲学に深い関心を持った者は，守屋喜七を中心として協議し，務台を通して西田の承諾を得たうえで，信濃哲学会が1920（大正9）年1月に創設された。この会の基本的性格は，（1）西田幾多郎に私淑している者の集まりであること，（2）西田幾多郎から西田哲学を聞く会であること，（3）会員は四，五〇人とすること，（4）講演だけを聞く臨時会員は認めないこと，（5）永続的計画的な会であること，であったという。信濃哲学会の代表者は守屋で，会の事務をとる幹事には後に長坂利郎が務めることとなった。会費は毎月一円で，会員は菅沼知至の「信濃哲学会と私」（『信濃教育』841号）によると，創立当時は四〇人ぐらいであったという[25]。

信濃哲学会の創立について菅沼知至は「人格思想ともにすぐれているりっぱな哲学者に師事して，長く変らぬ指導を受けて各自の人格をみがき，思想を深め，人生観を確立していくにしくはない。これを実現する唯一の道は，なんといっても西田先生（西田幾多郎）にお願いして，その計画指導の下に勉強していくよりほかにないという考えに一致し，有志会合してその具体案を作り，務台君（務台理作）をわずらわして，西田先生の内諾を得てできたのが信濃哲学会である」[26]と記述している。また，信濃哲学会への西田の関わりについて務台自身は，『西田幾多郎全集第十四巻』の後記の中で次のように述べている。

信濃哲學會は大正九年一月長野縣小學校教育者の有志によって，西田先生の指導を中心に仰いで哲學を研究するという趣旨の下に組織されたものである。その成立に際して私から先生にその指導をお願いしたのであるが,先生は快く承知され,まず初めに西洋哲學史をみっしり勉強することを勧められ,その講師として安倍能成氏を推された。それから二年間同氏について哲學史の勉強をし，大正十二年會員約四十名京都へ出かけ，京都府教育會館の一室を借用して，先生を招じ，二日間カントの実践哲学の講義を受けた。その折特別の筆記はとらなかった。次で京都でまたは信州に於いて，先生に受講すること七回に及んだ。つまり前後八回，時日にして二十二日間の講習を受けた。

その内容からみると，第一回より第四回までは，カント，フィヒテ，コーヘン，プラトンというように，安倍氏の哲学史のあとを受けて大哲学者の哲学を講じ，その準備の上で第五回昭和九年「実在の根底としての人格概念」という題で，はじめて先生自身の哲学について講ぜられた。その後第六回「行為の世界」，第七回「現実の世界の倫理的構造」，第八回「歴史的身体」というように，その当時書き上げられた論文と関連あるテーマについて話された[27]。（下線は筆者）

信濃哲学会では，西田によって推薦された安倍能成の西洋哲学史を皮切りに，長野県師範学校や，時には京都府教育会館を会場として，務台及び西田自身からその哲学を学んでいった（信濃哲学会における全講義は表2を参照）。

こうした信濃哲学会の活動の中で，『西田幾多郎全集』（第十七巻）における西田の日記に依ると，度々，信濃教育会の会員として長坂や菅沼等が，時には務台を連れ立って西田を訪問している[28]。務台と西田との師弟関係とともに，こうした西田に対する信濃教育会会員による直接的な働きかけが，「信州哲學會の事は尚よく考はて見せう私は決して二三回の話を厭ふ譯では御座いませぬが唯遠方まで出かけて來て不十分な話を聞くよりはそちらで若い人からゆっくり話を聞く方が皆々の爲になる様におもひ又私はもう少し私の立場から實踐哲學の方がまとまれば皆々もつと適切な話もできると思ふがまだそれまでに到らず心苦しく思ふので御座います併し尚よく考へて御返事致します」[29]や，「信州哲學會諸君の事會員諸君の熱心には感激の至りに堪へませぬ　絶對に斷るといふ譯ではないが今度の正月だけは猶予してもらはれないか」[30]といった西田の信濃哲学会への関与に対する躊躇[31]にも関わらず，1920（大正9年）から1937（昭和12）年という17年間に及ぶ信濃哲学会と西田との直接的な関係を維持させることとなったと言えよう[32]。

以上のように，「西田幾多郎から西田哲学を聞く会」として創立された信濃哲学会は，1945（昭和20）年6月7日の西田の死とともに解散するが，その精神は各郡につくられた哲学会へ受け継がれた。『長野県教育会史』に依れば，信濃哲学会の発足が刺激となって，県内各郡に哲学会がうまれてきた。また，その講師には西田門下生たちが招かれることとなり，それらの会が継続的に哲学の研究を行っていった。諏訪では高坂正顕，南安曇では高山岩男，下伊那では下村寅太郎，木曽では金子武蔵，上水では木村素衛など，西田門下が招かれていたとされる[33]。

なお，その直接的関連は現時点では不明だが，信濃哲学会が創立された1920（大正9）年は，「大戦後外来思想の流入の為に，教育者の思想も亦動もすれば動揺を来す如き惧れがある」として，帝国教育会によって「思想問題研究会」が設立されている[34]。

2－2　長野県内各教育会における哲学会・哲学同好会の創立と活動

ここでは，長野県内の各教育会史や年史の記述に拠って，哲学会・哲学同好会の創立と活動の状況について検討する。

西田幾多郎が1935（昭和10）年の務台宛書簡において，「信州の方はなんとか君が主となつて高坂高山あたりでやつてくれないか」[35]と述べたように，務台を媒介として西田門下が，長野県内各地の教育会において哲学会や哲学同好会の講師となっていった。

まず，『上伊那教育会史』に依ると，上伊那教育会において1926（大正15）年，郡内小学校教員有志により哲学会が創設された。この哲学会創立の陰には，大正期の郡教育会及び各支会による数々の哲学講習会があった。1914（大正3）年の夏期講習における金子馬治の近代思潮の講義をかわきりに，同じ八年には石原謙による宗教哲学，九年に同じく石原謙による希臘哲学史と中世哲学史，1921（大正10）年に田辺元による近世哲学（カント以前），そして1922（大正11）年の宮本和吉による現代哲学（ショウペンハウエルまで）と西洋哲学史の講習会が熱心に続けられた。しかし，「哲学史講習が終わりに近づくに従って，難解であると言う説も出て，最後の現代哲学の頃になると，聴講者は激減（中略）最後の状態を見ては之以上教育会の事業として継続する事は無理であるから，今後は吾々有志の会合として勉強する様にしたいと言う話が出た」（伊藤泰輔「上伊那郡教育会主催講習会の足跡を辿る」『上伊那教育第一一号』）。こうして新たに指導者を招聘することとなり，長野県出身の務台理作の紹介で木村素衛を指導者として招き，1926（大正15）年に上伊那哲学会が発足した。同年6月20日から4日間に亘るカントの第一第二批判の講習に始まり，1929（昭和4）からは西洋哲学史，十年に歴史哲学・自然哲学，1938（昭和13）年には法の哲学へと進んでいった。その間，木村素衛を中心に，高坂正顕・山本饒・下村寅太郎等が講師となっている[36]。講演会の記録としては，1939（昭和14）年（南部教育会）に木村素衛の「ヘーゲル哲学」，高坂正顕「題不詳」，1940（昭和15）年に下村寅太郎の「哲学的方法論」，1944（昭和19）年に木村素衛の「科学について」がある[37]。こうした上伊那哲学会の活動は，信濃哲学会解散後も継続され，1955（昭和30）年11月26日には，上伊那哲学会30周年記念講演会が伊那小学校にて開催され，務台理作をはじめ，下村寅太郎，西谷啓治，高坂正顕等が講演を行っている[38]。

次に『下伊那教育会 百周年記念』に依ると，下伊那教育会では，1932（昭和7）年10月，下伊那哲学会が会員166人をもって結成された。下伊那哲学会では，第一期（昭和7年－昭和15年）は，カント哲学時代とされ，カント「純粋理性批判」の読み合わせが行われ，講師として務台理作（昭和8年），下村寅太郎（昭和9～15年）が招かれた。また，第二期（昭和16年－昭和20年）は，自然哲学時代とされ，講師として下村寅太郎[39]が招かれた。戦後を迎えてからも下伊那哲学会は継続され，第三期（昭和21年－昭和24年）は，田辺哲学研究の時期として，田辺元「種の論理の意義を明らかにす」及び「実存と愛と実践」の読み合わせが行われ，講師として下村寅太郎が招かれた。第四期（昭和25－34年）は，デカルト・スピノザ・ライプニッツ・ヘーゲル哲学研究の時期とされ，デカルト「省察」，スピノザ「エチカ」，ライプニッツ「単試論」，カント「プロレゴーメナ」，ヘーゲル「小論理学」の読み合わせが行われ，講師として永井博が招かれた。第五期（昭和35－42年）は，キルケゴール・ハイデガー・ベルグソン哲学研究の時期として，キルケゴール「死に至る病」，ハイデッガー「存在と時間」，ベルグソン「哲学の方法」「時間と自由」の読み合わせ，講師として永井博が招かれている。1952（昭和27）年には，哲学会二十周年記念式典を開催し，下村寅太郎，永井博の記念講演を行ったとされている[40]。

木曽教育会の哲学会に関する記録は少ないが，1937（昭和12）年のみ同好会の記録があり，木曾哲学会，木曾読書会，木曾国文学同好会があったとされ，哲学では高坂正顕を講師として招いて「西田哲学に於ける身体の問題」と題して講演会をもっている[41]とされる。

また，上水内教育会では，戦後最初に発足した同好会，上水内読書会（会員250名）において，1946（昭和21）年4月に，木村素衛，高坂正顕らの「文化の本質と教育の本質」，「表現愛」，「カント純粋理性批判」の講習会の記録がある[42]という。

務台の出身地でもある南安曇教育会では，1938（昭和13）年に南安曇哲学会が発足する。講師として務台を招き，西田幾多郎の『善の研究』を手始めに，1940（昭和15）年からは『哲学の根本問題』，1943（昭和18）年からは『実践哲学序論』をテキストとして西田哲学を究明していくことになった[43]。こうした南安曇教哲学会は，戦争によっても閉じることなく研究を継続し，終戦の昭和二十年からの二年間は『場所の論理』（務台理作）を，さらに，二十二年からの二年間は『場所的論理と宗教的世界観』（西田幾多郎）をテキストにとり上げ，一貫して哲学研究を進めた[44]。それとともに，務台の出身地である南安曇教育会関係者をはじめとして，信濃教育会と務台理作との関係は，終戦後も維持されていくこととなる（表3参照）。

以上のように，西田哲学は，務台が京都帝国大学に在籍していた1916（大正5）年以降から年1920（大正9）年にかけての，務台による媒介と長野師範学校卒業者の強い働きかけによって信濃哲学会を通して信濃教育会に普及して行ったといえよう。信濃哲学会自体は1945（昭和20）年に解散に至る[45]が，その西田哲学は，これもまた務台の媒介によって，長野県内の各教育会の哲学会や哲学同好会に高坂正顕や木村素衛といった西田門下が講師として招かれることによって普及して行ったと考えられる。そして，そうした各教育会における哲学会や哲学同好会の活動は，戦後も継続されていったのである。

結語

これまで検討してきたように，信濃教育会と務台理作との直接的な関係は，長野師範学校訓導として赴任して以降の1914（大正3）年に始まったが，それ以前から長野師範学校卒業者との人脈が形成されていた。その長野師範学校卒業者が中心となった星菊太長野師範学校長排斥事件直後に務台は，京都帝国大学入学し，1915（大正4）年から1945（昭和20）年にかけて西田幾多郎門下として，長野師範学校卒業者達の時代的メンタリティにも後押しされて，信濃哲学会の創立と活動に関わっていった。

このように，信濃教育会と務台理作との関係は，長野師範学校関係者としての務台，京都帝国大学卒業者としての務台という二つの要素が重なり合いながら，戦前から戦中に亘って維持されていったのである。そのことの意味について考察すると，信濃教育会が戦後も存続したことについて森川輝紀は，「占領期，軍政部の介入があったとしても，信教存続の背景に教育専門家による教育問題の研究・調査の『伝統』に即して，戦後教育にとりくもうとする『世論』があったことは否定できないであろう」[46]と指摘している。これまで検討してきたように，戦前戦中に信濃哲学会における活動を中心に信濃教育会と京都学派とを結びつけることに尽力した務台は，森川が指摘するような信濃教育会の「伝統」と「世論」の形成にとって不可欠の存在であったと言えよう。

そのことと関わって，『南安曇教育会百年誌』では，「務台が京都大学に学び西田幾多郎に師事して務台哲学を築いていった歩みはまさに信濃哲学会，南安曇哲学会，他郡市の哲学会に深くかかわる道であり，（中略）務台の存在は信州教育界に大きな貢献をしたといわなければならない」[47]と述べられているが，信濃教育会に対する務台のそうした役割を可能にさせた大きな要因の一つは，高等師範学校－京都帝国大学という進学ルートであったと言えよう。所謂「傍系」のルート[48]を辿った務台のような事例は特異であるとも考えられるが，務台と同様に，高等師範学校－京都帝国大学という進学ルートを辿った教育会関係者の教育会との関係にも注目する必要があろう。例えば，広島文理科大学長となった長田新は広島高等師範学校を卒業後，大分師範学校で心理学を講じた後，京都帝国大学哲学科に入学している。

本稿で検討対象とした資料は，長野県内の各教育会史を主としており，長野県内の各教育会が発行する雑誌（例えば『上伊那教育』など）の検討まで及んでいない。よって，長野県内の各教育会における務台や京都学派の影響の詳細に関しては，充分に明らかになったとは言い難い。また信濃哲学会自体は，1945（昭和20）年6月7日の西田の死とともに解散するが，務台と信濃教育会との関係はその後も維持されていった。そうした，戦後の務台と信濃教育会との関係の検討についても今後の課題としたい。

表1　務台理作 年譜

年	歳	事　　項
1890（明治23）年	0	長野県南安曇郡温（ユタカ）村（現安曇野市）に生まれる
1896（明治29）年	6	南安曇郡温村立長尾尋常小学校（四年制）に入学 ※同級生に松岡弘（後に信濃教育会会長）
1900（明治33）年	10	明盛村温村学校組合立明盛温組合高等小学校（四年制）に入学
1904（明治37）年	14	梓村他二ヶ村組合立高等小学校補習科（二年制）に入学 ※金井虎雄や松岡弘らと交友
1906（明治39）年	16	松本郁文学校（私立，明治36年開校，大正11年廃校）の三年に編入 英語・数学・漢文等を主に学ぶ
1907（明治40）年	17	4月 東筑摩郡和田小学校（校長岡村千馬太）の代用教員 10月 明盛組合高等小学校へ代用教員として転任　※同僚に鳥羽佐一
1909（明治42）年	19	4月 松本尋常高等小学校源池部へ転任　中学校卒業検定試験に合格
1910（明治43）年	20	2月 東京高等師範学校予科の二次合格者となる 4月 東京高等師範学校国漢科に入学 ※同学年に土田杏村，長坂利郎（後に鍋屋田小学校長）
1914（大正3）年	24	3月 東京高等師範学校国語漢文部を卒業 4月 長野師範学校（教諭兼訓導）へ赴任 　本科の心理学と附属高等小学校三年の国語を講ず ※松岡弘等の紹介で菅沼知至，岩下一徳と知り合う
1915（大正4）年	25	7月 長野師範学校を退職　京都帝国大学文学部哲学科に入学 ※二年後輩に三木清，三年後輩に戸坂潤等
1918（大正7）年	28	10月 大学院に進学
1920（大正9）年	30	信濃哲学会（代表守屋喜七，後に長坂利郎）の発足に尽力 8月 京都帝国大学文学部副手となる
1922（大正11）年	32	3月 京都帝国大学大学院を退学
1923（大正12）年	33	3月 京都帝国大学文学部副手を依願退職し，大谷大学学部哲学科西洋哲学史教授となる
1926（大正15）年	36	1月 大谷大学を退く 2月 台湾総監督府高等学校教授となり，在外研究員として二年間ドイツ，フランスに在留ことを命じらる 4月 ハイデンベルヒ大学に学ぶ（高橋里美と同宿） 10月 フライブルクに移り，フッサールに師事
1928（昭和3）年	38	4月 台北帝国大学文政学部教授となり，哲学を講ず
1935（昭和10）年	45	4月 東京文理科大学教授となる 9月 東京高等師範学校教授を兼任する
1945（昭和20）年	55	7月 東京文理科大学長，東京高等師範学校長に就任（※6月 西田幾多郎死去（76歳））
1947（昭和22）年	57	11月 文部省教育研究所長に就任
1948（昭和23）年	58	7月 東京文理科大学長を退き，教授となる
1951（昭和26）年	61	3月 東京文理科大学，東京教育大学を退職 4月 慶応義塾大学文学部及び大学院の教授となる
1964（昭和39）年	74	3月 慶応義塾大学を退職
1974（昭和49）年	83	7月5日　東京にて永眠

註）『務台理作と信州』の年譜を一部改変して筆者作成。

表2　信濃哲学会の歩み

年度	研究テーマ（演題）	講師	場所
大正9	西洋哲学史	安倍能成	県師範
10	〃	〃	戸隠宝光社
11	カント認識論	務台理作	県師範
12	カント道徳論	西田幾多郎	京都府教育会館
12	カント美学	務台理作	〃
13	フィヒテ哲学	西田幾多郎	〃
14	コーエン哲学	〃	下高井平隠小
15	フッサール現象学	務台理作	県師範
昭和2	プラトン哲学	西田幾太郎	京都府教育会館
7	実在の根底としての人格概念	〃	信濃教育会館
9	行為の世界	〃	京都府教育会館
10	現実の世界の論理的構造	〃	京都府教育会館
12	歴史的身体	〃	県女子専門

出典）『長野市教育会史』166頁。

表3　南安曇哲学会における講師とテキスト

年度	講師	テキスト
昭和13・14年	務台理作	善の研究（西田幾多郎）
昭和15～17年	〃	哲学の根本問題（西田幾多郎）
昭和18・19年	〃	第四編文集実践哲学序論（西田幾多郎）
昭和20・21年	〃	場所の論理学（務台理作）
昭和22・23年	〃	場所的論理と宗教的世界観（西田幾多郎）
昭和24～30年	勝田守一	教育哲学（勝田守一）
昭和31・32年	務台理作	現代論理思考の研究（務台理作）
昭和33～37年	〃	哲学概論（務台理作）
昭和38・39年	勝田守一 堀尾道久	岩波講座第二集
昭和40・41年	高坂正顕	人間像の分裂とその回復（高坂正顕）
昭和42～44年	清水富雄	善の研究（西田幾多郎）
昭和45年	〃	実在の根底として人格概念（西田幾多郎）

出典）『南安曇教育会百年誌』654－655頁。

【参考文献】

・梶山雅史編『近代日本教育会史研究』学術出版会，2007年。

・梶山雅史編『続・近代日本教育会史研究』学術出版会，2010年。

・梶山雅史・竹田進吾「教育会研究文献目録Ⅰ」『東北大学教育学研究科研究年報』第53集第2号，2005年。

・小川正人「1920年代の教員統制の展開 - 教員運動の新展開と体制「再編」への対応を1つの軸として－」『東京大学教

育学部紀要』第16巻，東京大学教育学部，1977年。
・長野県佐久郡教育科学研究会『長野県教育のあゆみ』労働旬報社，1975年。
・佐藤秀夫「高等教育会および地方教育会」海後宗臣編『井上毅の教育政策』東京大学出版会，1968年。
・石戸谷哲夫『日本教員史研究』講談社，1967年。
・上沼八郎『信州教育史の研究』信教印刷株式会社，1964年。
・『西田幾太郎全集第十四巻』岩波書店，1966年。
・『西田幾多郎全集第十七巻』岩波書店，1966年。
・『西田幾多郎全集第十八巻』岩波書店，1966年。
・『西田幾多郎全集第十九巻』岩波書店，1966年。
・『務台理作著作集第三巻』こぶし書房，2001年。
・『務台理作著作集第五巻』こぶし書房，2001年。

【教育会史・教育史関連参考文献】

・長野県教育史刊行会編集『長野県教育史 第三巻』長野県教育史刊行会，1983年。
・信濃教育会『信濃教育会九十年史 上』信濃毎日新聞社，1935年
・信濃教育会『信濃教育会九十年史 下』信濃教育出版部，1977年。
・南安曇教育会百年誌編集委員会『南安曇教育会百年誌』南安曇教育会，1988年。
・南安曇教育会・務台理作委員会編『務台理作と信州』南安曇教育会，1991年。
・上水内教育史編集委員会『上水内教育史』上水内教育会，1989年。
・信濃教育会編『雑誌 信濃教育 1』国書刊行会，1982年。
・信濃教育会編『雑誌「信濃教育会」総目録』国書刊行会，1982年。
・上伊那教育会史編集委員会『上伊那教育会史』上伊那教育会，1993年。
・下伊那教育会史編集委員会『下伊那教育会史 百周年記念』下伊那教育会，1987年。
・長野市教育会史編集委員会『長野市教育会史』長野教育会，1991年。
・木曾教育会百年誌編纂委員会『木曾教育会百年誌』木曾教育会，1986年。

【註】

1）　郁文学校は，務台理作の「学究生活の思い出」（『務台理作著作集第五巻』所収）に依れば，「今日の各種学校にあたり，学科は英・漢・数を主とするもの，したがって卒業の資格というものも全くなかった」（280頁）という。

2）　梶山雅史編『続・近代日本教育史研究』学術出版会，2010年，13-15頁。

3）　『信濃教育』は，1886（明治19）年7月18日に改正された信濃教育會規則における第六条「本會ハ左ノ事項ヲ行フモノトス　演説　談話　討論　講義　質疑及報道」及び第七条「本會ハ毎月一回第六條ノ事項及各地會員ノ通信ヲ載録シ雑誌ニ発刊シ之ヲ會員ニ頒ツベシ」とされたことにより発行が開始された。

4）　『長野市教育会史』1991年，165-166頁。

5）　務台の書簡類に関しては，南安曇教育文化会館（長野県）に，1909年から1972年にかけての書簡の写筆，講演録の複製等が保存されており，その史料の一部が『務台理作と信州』（安曇教育会，1991年）に編集されている。その書簡の多くは，実兄や，高等小学校時代，高等師範学校時代からの知人に宛てたものである。

6）『南安曇教育会百年誌』297-302頁。

7）『信濃教育会九十年史 上』559-596頁の「役員一覧表」及び「議員一覧表」を参照。

8）同上，292頁。

9）『長野市教育会史』156頁。

10）『長野県教育史 第三巻』619頁。

11）『長野県教育史 第十三巻』1019-1020頁。

12）同上，901-903頁。

13）『長野市教育会史』に依ると十二名の内訳は，長野の関係者として，松本深，小山林太郎，平林宇喜，その他の郡市代表として斉藤節，長坂利郎，松岡弘等であったという（157頁）。

14）『長野県教育史 第三巻』，621頁。

15）『信濃教育九十年史 上』242頁。

16）『長野市教育会史』158頁。

17）『長野県教育史 第三巻』，621-622頁。

18）『務台理作と信州』560頁。

19）「学究生活の思い出」（『務台理作著作集第五巻』所収284頁。

20）金井正（1886-1955年）は，大正5年，西田や田辺元を信濃教育会小県支部主催の夏季哲学講演会に招いたとされる。大正10年には信濃自由大学創設に加わる（長島伸一「自由大学運動の歴史的意義とその限界」『経済志林』法政大学経済学部学会，2006年を参照）。

21）守屋喜七は，1910（明治43）年以降，信濃教育会の本会選出議員を務め，1915（大正4）年から1924（大正13）年にかけて，信濃教育会の評議員や幹事を断続的に努めている（『信濃教育会九十年史 上』568-571頁）。また，1920（大正9）年5月から1923（大正12）年9月まで長野市教育会会長となっている（同上書，768頁。）。

22）『長野市教育会史』165頁。

23）『南安曇教育会百年誌』906-907頁。

24）同上。

25）『長野市教育会史』166-167頁。

26）『南安曇教育会百年誌』605-606頁。

27）『西田幾多郎全集第十四巻』421-422頁。

28）『西田幾多郎全集第十七巻』から判明する限りだと，信濃教育会関係者の西田訪問は，大正13年1月5日（高田，菅沼），昭和3年4月26日（訪問者不明），昭和9年1月4日（菅沼），同年同月7月（長坂，菅沼），昭和11年6月5日（訪問者不明），昭和12年8月10日（務台，長坂）と計6回を数える。

29）『西田幾多郎全集第十八巻』（昭和十年十月十日務台理作宛書簡）543-544頁。

30）『西田幾多郎全集第十八巻』（昭和十年十一月十一日務台理作宛書簡）548頁。

31）務台の昭和3年7月2日菅沼知至宛書簡においても，「信濃哲学会に関する件について，（中略）先生のご意志は，はっきりと承ることが出来なかった」などと述べられている（『務台理作と信州』483頁）。

32）『西田幾多郎全集第十九巻』には，西田から長坂利郎宛書簡7通が掲載されており，その中では「信濃哲學會へ百圓

寄贈（旧字：貝辺に曾）申上げたい」（620頁）との記述も見られる。

33）『長野市教育会史』167頁。

34）小川正人「1920年代の教員統制の展開―教員運動の新展開と体制「再編」への対応を1つの軸として」『東京大学教育学部紀要』第16巻，東京大学教育学部，1977年，259頁。

35）『西田幾多郎全集 第十八巻』（昭和十年五月二十五日 務台理作宛書簡），530-531頁。

36）『上伊那教育会史』296頁。

37）同上，308-309頁。

38）同上，667頁。

39）『下伊那教育会史 百周年記念』561頁。

40）同上，569頁。

41）『木曾教育会百年誌』200頁。

42）『上水内教育会史』551頁。

43）『南安曇教育会百年誌』608-609頁。

44）同上，611頁。

45）『務台理作と信州』に依ると，信濃哲学会最後（1945年1月）の講演者は務台理作，安倍能成，高坂正顕であった（568頁）。

46）森川輝紀「教育会と教員組合―教育ガバナンス論の視点から―」梶山雅史編『続・教育会史研究』学術出版会，2010年，488頁。

47）『南安曇教育会百年誌』912頁。

48）務台が京都帝国大学に進学した1915（大正4）年当時，帝国大学は東京，京都，東北，九州の4校。そして，京都帝国大学入学者の572名のうち，高等師範学校卒業者は32名（約6%）であった。なお，東京帝国大学入学者で高等師範学校卒業者は0名（天野郁夫『大学の誕生（下）』中央公論社，2009年，243頁）。

The Role of RISAKU MUTAI in Shinano Educational Association :

Focus on the Relation of Kyoto School Centered on the Shinano Philosophy Society

Toru KANAI

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University / Instructor, Shuko Junior College)

This paper explored the role of RISAKU MUTAI in Shinano Educational Association (SEA) and each association in Nagano prefecture in pre-war and during World War II by focusing his activities in Shinano Philosophy Society (SPS).

The relationship between Mutai and SEA started in 1914 he took his post as a teacher of Nagano Teacher School, but he had already built up connections with the graduates of the school. Mutai was involved in establishment of SPS and its activities as a disciple of Kitaro Nishida since 1915 he advanced to Kyoto Emperor University, and played the role make relationship between SEA or each educational association in Nagano Pref. and a Kyoto School. His activities particularly in SPS affected making “tradition” and “public opinion” of SEA during World War II and in postwar period.

Keywords : Risaku Mutai, Shinano Educational Association, Shinano Philosophy Society, Nagano Teacher School, Kyoto School